

二葉亭四迷（長谷川辰之助）が日本におけるロシア文学受容史において、最初の特筆すべき人物であることは言をまたない。彼はベリンスキイらロシア批評家に啓発されてその文学理論を形成し、ゴンチャロフ、ドストエフスキイを始めとするロシア作家の影響をうけて『浮雲』、『其面影』、『平凡』などの創作を残し、翻訳を通じてツルゲーネフ、ゴーリキイらのすぐれたロシア文学を日本に紹介した。従って、その後の日本におけるロシア文学受容の方向が、彼によって大きく左右されたと言っても過言でない。そして、このことはロシア文学観についてもあてはまりはしないか。

二葉亭のロシア文学観を語る時、必ず引用される言葉がある。一つは「予が半生の懺悔」（明治四十一年）に書かれた「私のは、普通の文学者的に文学を愛好したといふんぢやない。寧ろロシアの文学者が取扱ふ問題、即ち社会現象（中略）を文学上から観察し、解剖し、予見したりするのが非常に趣味のあることゝなったのである」（岩波書店「二葉亭四迷全集」昭和三十九—四十年、第五卷266頁。以下引用はこれにより、V・266のように記す）という個所であり、もう一つは「露国文学の日本文学に及ぼしたる影響」の次の個所である。

「目今の日本の作家は、或は人生問題に接触して、その根本意義を解さうと努めては居るけれども、人生の或る一部を以て、全般に亘らうとして居る風がある、未だ遊び半分に従事して居る傾きがある、ツルゲーネフ時代の作家に比しては、不真面目である。

所が露西亞の作家はさうでなかつた、真面目に人生問題の全般に亘つて考究した、であるから日本文学者のやうに、文学一点張りで他方面の事は関せず焉で居たのではない、又實際当時の露國政府は、何をいふにも頑迷で暴虐であつたのだから、甚しい圧迫を国民に加へた、政治家は政治問題として研究して居たのに、文学者はそれを人生問題として研究した、作の上にも自ら血ある涙あるものとなつて現はれツルゲーネフの小品一篇はよく奴隸解放に力あつたといはれて居る位である、」（V・283）

このようなロシア文学観は、日本で出版されている多くの「ロシア文学史」の見解と似通つて<sup>(1)</sup>いる。つまり、社会現象を文学上から観察、解剖し、真面目に人生問題の全般に亘つて考究した文学<sup>(2)</sup>ロシア文学という伝統的なロシア文学観は、二葉亭をもって嚆矢とすることも可能である。

しかし、二葉亭自身がたびたび語っているロシア文学観と、彼の実践の間に幾らかの齟齬を感じるの自分一人ではあるまい。例え

ば、ロシアの農奴解放に力のあったツルゲーネフの作品は『獵人日記』だが、この作品から農奴制の非人間性を摘発することを主眼に選ぶなら、『あひどき』以外に訳すにもっとふさわしい作品があったと指摘されているし、創作に因りて見ても、『其面影』、『平凡』に加えられた「少し突き放し過ぎた嫌ひ」(Ⅲ・40)、<sup>(2)</sup>「世の中を見くびりすぎる嫌」(Ⅲ・400、傍点原文)、「主人公を余りに馬鹿にして書いた気味」(Ⅳ・426)といった批判は、二葉亭自身が本人の言う「不真面目」な日本の作家に近かった印象さえ抱かせかねない。こうした観点から、本稿では二葉亭とゴーゴリのつながりを軸に、二葉亭が直接には語らなかつたロシア文学観を探ってみたい。

## 二一

二葉亭の翻訳した数で見ると、ロシア作家中ではツルゲーネフが圧倒的に多く、<sup>(3)</sup>ゴーゴリはゴリキイについて三番目である。しかし、神西清氏に従って二葉亭の翻訳を三期(一期は明治十九―二十二年、二期は明治二十九―三十二年、三期は明治三十六―四十二年、Ⅹ・172―175)に分けると、ツルゲーネフの訳述が一期と二期に集中し(Ⅹ・175)、ゴリキイの翻訳が三期にしかないのに対し、ゴーゴリの作品は一期から三期にわたって訳されており、清水茂氏の言葉を借りれば、「ゴーゴリにたいするインタレストは、しずかに深くつづいてきた」ことを窺わせる。(北岡誠司氏によれば、二葉亭在学中、外語の図書館に一八七四年版のゴーゴリ四巻全集があり、授業とあわせて、かなりの作品に親しんでいたと推測できる。)

とは言え、翻訳以外でゴーゴリの名が二葉亭に言及されることは稀であり、ゴンチャロフ、ドストエフスキイのように、自己の創作

とからめて触れられたことは一度もない。従って、二葉亭の創作とロシア文学の関係を語る時は、『浮雲』とゴンチャロフ、ドストエフスキイ、『其面影』とツルゲーネフ、『平凡』とトルストイ、ゴンチャロフなどに言及されるのが常であり、ゴーゴリの名はほとんど登場しない。

しかし、同時代の『其面影』評でも、「ちょっと——気のせいかも知れぬが——『ゴリ』を読む心地がある」(Ⅲ・398)と語られているように、ゴーゴリとの類縁関係は決して看過できない。そして、そこには今まで見落されてきた二葉亭のロシア文学観も窺えるように思える。これまでの見方に従えば、二葉亭にとってゴーゴリは「貴族、官僚、金権のばつこした十九世紀中葉のロシア社会を諷刺的にめぐり出した」作家であるはずだが、それだけでは『肖像画』、『むかしの人』、『狂人日記』とつづく彼の訳業は説明できない。『狂人日記』はまだしも、他の二作品は決してそれにふさわしい作品ではない。そして、先に引用した「露国文学の日本文学に及ぼしたる影響」に「ツルゲーネフ時代の作家」とあったように、社会諷刺、社会批判という側面だけなら、ゴーゴリよりも後の作家の方が辛辣さを増しており、ゴリキイらにまで知識の及ぶ二葉亭がその意味でゴーゴリにこだわるとは到底思えない。

では、二葉亭はゴーゴリのどこにひかれたのか。その答えはまず文体的要素に求められるべきではあるまいか。

二葉亭が近代日本文学における言文一致体小説創始者の一人であることはよく知られている。現存する彼の最初の言文一致体小説は『浮雲』であるが、その前にツルゲーネフの『父と子』の一部を訳した『虚無党形氣』のあったことが出版予告(ⅩⅢ・156―157)から確認されている。更に、今日の研究では坪内逍遙、内田魯庵の回想か

ら、それより以前に、つまり二葉亭最初の口語訳として「ゴーゴリの或作の一断片」があったことも認められている。<sup>(11)</sup>要するに、二葉亭はゴーゴリの口語訳をもって自らの文学活動を開始したのである。

中村光夫氏は「二葉亭にとって、言文一致の文章は、まづロシア文学の正確なイメイチを日本語でつくりだすために必要だった」と指摘しているが、ではそのためにゴーゴリが選ばれたのは何故であらうか。

新谷敬三郎氏は「三馬とゴーゴリとの出会い」という表現で、二葉亭が江戸戯作文学の身ぶり言語と共通する要素をゴーゴリの言語に見てとったと推測しているが、二葉亭がゴーゴリにひかれた第一点はおそらくその語り、文飾の面白みだったと思われる。東京外国語学校在学中に、ロシア人教師による朗読の形でロシア文学に親しんだ二葉亭は、「外国の小説を、いはば生の形で精神にうけとめた」<sup>(16)</sup>のであり、その彼がゴーゴリの言葉の面白みにまずひかれたとしても何の不思議もない。つまり、二葉亭は小役人の悲哀を描いて、ロシア社会の悪を諷刺した自然派作家としてゴーゴリをとらえるよりも、「地口と洒落に頼って人物を描き出し」、「もっぱら音調と語の感覚的イメージを表現の武器としている」作家としてゴーゴリをとらえたのであり、このことは「或作」の訳訳が直接に『浮雲』の制作とつながっていることを示している。

だが、『浮雲』に話を移す前に、この「或作」とは何であろうか。清水茂氏は「中産級の夫婦が互に何事かをやや激して談じてゐる件」を、「おまひ」「おれ」「さうかい」「さうしな」という調子の「裏店調（プロレタリア調）」とでもいふやうなぞんざいな口吻<sup>(18)</sup>で訳したこの作品を『検察官』第五幕であろうと推測しているが、<sup>(20)</sup>

『検察官』第五幕での市長と夫人とのやりとりは有頂天の会話であり、また二人を「中産級の夫婦」と呼ぶのもそぐわない。逍遙の「脚本だったと思ふ」との回想には矛盾するが、寧ろこの作は小説と考へたい。二葉亭の訳業にはツルゲーネフの翻案である『わからずや』（明治三十八年）を除いて戯曲はなく、創作にも戯曲はない。この作の口語訳を戯曲と考へることは、言文一致体小説の道を模索した二葉亭の文学活動全体から見てもおかしくはなからうか。それ故、ここではこれは『鼻』ではないかと考へたい。パンを切つてそこに人の鼻を探りあてた床屋の主人と、彼をどなりつける細君との短いやりとりは、逍遙の回想に最も合致するように思える。

こうしてゴーゴリの「或作」、ツルゲーネフの『父と子』の部分訳を試みた後、二葉亭は処女作『浮雲』の制作にとりかかる。（この間彼は小説理論の宣言として「小説総論」を著わすが、この本来真面目な論文中でも「勸懲小説」の「勸懲」を「流腸」とかけて、<sup>(23)</sup>「痔疾の療治をするやうに」(V・10)と語っている。これも『外套』で主人公パシマチキンの痔持ちを「喜劇的な音の身振りとして」表現したゴーゴリとの感覚的な類縁性を思わせる。)

『浮雲』に関しては、しばしば第二篇途中からの内容的変化が指摘され、前半がロシア文学等の模倣性の濃い構想・文体であるのに対し、後半になって作者固有の創造性が獲得されたと評されてもいる。しかし、二葉亭自身の述懐によれば、第一篇は式亭三馬、巖庭篁村らの戯作者的文体であり、第二篇、第三篇になってドストエフスキイ、ゴンチャロフの文体を借りたとされて、前述の指摘と矛盾をきたしていた。

ところが、ここに二葉亭が語らなかつたゴーゴリを想定すれば矛盾は解決する。新谷氏の指摘によれば、二葉亭はゴーゴリの中に三

馬と相通じる言語を見ていたのであり、そうだとすれば、第一篇の模倣性の濃い文体の背後にはゴーゴリがいたのではあるまいか。そして、『浮雲』の冒頭部を見れば、ゴーゴリとのつながりはさらにはっきりする。『浮雲』第一篇は有名な次の文に始まる。

「千早振る神無月も最早跡二日の余波となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよくぞよく沸出でゝ来るのは、孰れも頭を気にし給ふ方々。しかし熟々見て寫と点検すると、是れにも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髭、顎の鬚、鼻に興起した傘破髭髭に、狎の口めいた比斯馬克髭、そのほか矮鶏髭、貉髭、ありやなしやの幻の髭と、濃くも淡くもいろ／＼に生分る。髭に続いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物づくめには仏蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。」(I・4)

関良一氏はこの冒頭部を坪内逍遙の『諷誠京わらんべ』の出だしの比較して、『浮雲』の冒頭は逍遙への挨拶だと考えた。<sup>(28)</sup>『諷誠京わらんべ』の出だしは次のようである。

「千早振神田橋のにぎ／＼しきは。官員退省の時刻とやなりけん。頭に黒羅紗の高帽子を戴き。右手に八字做す鬚を捻りて。頬に手車を急がしたまふは。知らず何の省の鮎藤さまぞや。(中略)馬車にめす勅任さま。馬にのる奏任がた。洋装の紳士。和服の歴々。思ひおもひに家路へと。別れて帰る退省どき。」<sup>(29)</sup>

確かにここでも「千早振」に始まり、官庁のひける時刻の神田界限のにぎやかさが描かれているように、両者には明白な共通点がある。しかし、関氏が『浮雲』に見た「髭づくし」<sup>(30)</sup>は寧ろゴーゴリの『ネフスキイ大通り』に近くはなからうか。次にその部分を引用してみよう。

「諸君はまたここで、非常に驚くべき技巧でネクタイの下をくぐらしている、とびきりの頬ひげにも出会うだろう、ピロイドのような、縞子のような、また黒貂や石炭のように真黒い、しかし、ああ、外務官僚にだけ風しているその頬ひげ。ほかの官庁の勤務者たちには神さまはこの真黒な頬ひげをお授けくださらないのだ、だから彼らにとってはきわめて不愉快なことだが、人參色のひげをぶらさげなければならぬという次第なのだ。ここでは諸君はまたベンによっても筆によってもあらわせないような、まことに絶妙な口ひげ<sup>(31)</sup>に出会うだろう。生活のよりよき半分がそれにさげられた口ひげ、——夜となく昼となく長いあいだ、氣を配る対象であった口ひげ、心を蕩かすような香水や香料がふりかけられ、またきわめて高価な、そしてきわめて珍しいポマードの塗られた口ひげ、寝るまえには薄い上質の紙で反りかえらせた口ひげ、持ち主が、もつともほろりとさせられるような愛着がただよっている口ひげ、そしてまた道ゆく人々の羨望的となる口ひげ。教知れぬ帽子や衣装やブラトートの種類、——ときにはまる二日間も店主たちの愛着が去らないような、派手で、軽やかなそれらの品々は、ネフスキイ大通りのどんな人の目をも眩まさせずにはおかないだろう。あたかもそれは海原なせる蝶の群れが、さつと草の茎から舞いあがり輝く雲となり、雄の黒い甲虫たちの上で

波のように揺れうごいているかとも思えるほどだ。」<sup>(32)</sup>

「髭づくし」の意味で両者が共通していることは一目瞭然である。また、逍遙には「右手に八字做す鬚を捻りて」と描かれた髭は人が主体であるのに対し、ゴーゴリの髭は換喩 (metonymy) としてそれ自身が人にとって代わっている。「浮雲」の髭を換喩と呼ぶことはやや無理だとしても、髭から服装へと移る二葉亭の視点に換喩への志向が見られるとは言えないか。つまり、ここには二葉亭がゴーゴリの文体を模倣した可能性も見てとれる。この他、「浮雲」の「蜻蛉」と「ネフスキ大通り」の「蝶」や「甲虫」に平行関係を導くのは危険であるが、この後の主人公の登場にはやはり共通性が見られる。

通りを行く大勢の人々から、二人の作家は共にスポット手法によって若い二人の男に焦点を絞る。どちらにあっても、この二人は正反対の性格を持ち、対照的に描かれている。「浮雲」の文三は融通がきかず免職になるが、昇は逆に上役にとり入って昇進を果たす。「ネフスキ大通り」のビスカリョーフはブリュネットの女を見染めて、彼女が売笑婦だとわかった後もあくまで理想化をやめないが、ピロゴーフはブロンドのドイツ人女房の後を追って、彼女に卑近な愛を求める。十川信介氏は従来の文三と昇を善悪の対立とみなす見解に反対して、これを理想主義者と現実主義者の対立と考える新見解を打ち立てたが、この見解はゴンチャロフの『断崖』の主人公ライスキイを引き合いに出すまでもなく、この『ネフスキ大通り』によって確認できよう。「浮雲」冒頭部はゴーゴリをモデルにしていると考えたい。

もちろん、「浮雲」とゴーゴリと言えば、二葉亭の言う「官尊民

卑」(V・102) 嫌い、即ち官僚批判の要素が従来指摘されており、観菊での課長の昇への応対と『外套』での有力者のバシマチキンへの応対の類似性も言われている。<sup>(37)</sup> また、二葉亭自身が『狂人日記』を訳していることから、上役の娘に横恋慕して報われず、官職が何だと思ふ主人公ポプリシチンと、昇進した昇にお勢を奪われる免職された文三が似ていないとも言切れない。(実際、二葉亭の腹案では文三もポプリシチン同様に発狂して、瘋癲病院に入ることになっていた。)<sup>(38)</sup>

しかし、繰返して言うが、二葉亭のゴーゴリ理解(それは彼のロシア文学観とも無縁のほががない)において、自然派的側面は決して、一番重要なものではない。そして、そのことを何よりも雄弁に語るものが、『むかしの人』の翻訳だと考える。

### 三

「或作」について二葉亭の訳したゴーゴリの作品は『肖像画』であり、発表された明治三十年は神西氏の言う第二期にあたる。ごくおおざっぱに言えば、この時期は官報局退職から東京外国語学校教授就任までに相当し、家庭の事情もあって「金銭の必要に迫られたため」(IX・97) 翻訳を再開したと言われている。そして、これに先立つ沈黙期に二葉亭は宗教、哲学などに取り組んで人生問題を探究していたと言う。従って、この作品は彼の文学的、宗教的探究の産物とも考えられ、彼がゴーゴリにひかれたのは専ら神秘的、宗教的なこの作品の芸術観の故だったと思われる。少なくとも、ここに社会問題とのつながりを見出すことはできない。

さて、ここで問題にしたい『むかしの人』は次の第三期に属する

もので、ちょうどこの時期は二葉亭の創作への復帰の時期にあつており、『むかしの人』と同年(明治三十九年)には『浮雲』につづく第二作『其面影』が、翌年には第三作で最後の小説となった『平凡』が発表されている。それ故、この訳業はつづく二つの創作と少なからぬ関連を有していても不思議でない。一例をあげれば、『むかしの人』には真昼の呼び声と言われる場面がある。二葉亭訳には「偶然後ろから可なり判然と「お爺さん」と云ふものがある。振返つて見たが誰もみぬ。四方を見渡しても灌木の中を覗いて見ても、誰の姿も見えぬ」(Ⅲ・210)とあるが、『其面影』で家を追われて兩國の駅に急ぐ小夜子も似たような声を聞く。

「偶と、「小夜さん!……」と聞慣れた其人の声が何処かでしたやうに思はれたから、延上つて其処らを回顧して見たが、其人らしい影も見えねば、」(Ⅲ・302)

これは些細な類似点であるが、全体として『むかしの人』の調子と、『其面影』、『平凡』の調子の間に似た感じがありはしないか。だが、それを考察する前にゴーゴリの原作の作品としての解釈に触れておかねばならない。

『むかしの人』(Гражданские поминки, 通例は「昔気質の地主たち」などと訳される)の解釈をめぐって、単純化して言えば、これまで二つの見方が相争ってきた。即ち、作者は主人公の地主夫妻の怠惰な生活を諷刺したのか、それともこれを牧歌的に愛着を持って描いたのかという二つの見方があった。日本では伝統的に前者の見方が強く、筑摩版世界文学大系の解説には「ここに描かれているのは、穏やかに老後を送る仲のよい老夫婦の生活で、それは一見

牧歌的とも見えるが、その底深く隠されている地方貴族の惰性的な生活の無意味さと低俗さに作者の目はするどく注がれている」とあり、河出版ゴーゴリ全集の解説にもほぼ同じ言葉がある。

しかし、欧米では概して後者の見方が支配的であり、「家父長的生活を美的、道徳的ユートピアとみる見方」、「中心となる調子は暖かさ心地よさ」と主張され、「もしこの魅惑的な短篇に諷刺的傾向が見出せるとしたら、それは偉大でも、高潔でも、美しくさえもないが、それでも愛と魅惑とを知っている無目的な存在の空虚さに対してではなく、むしろ平安と穏かさを知らない(中略)へ現実生活」にむけられている」のであり、諷刺的傾向はむしろ老夫婦の死後に現われる遺産相続人などに向けられていると考えられている。

では、二葉亭はこの作品をどうとらえていたのであろうか。彼には直接には何も言い残していないため、その検討は翻訳の言葉を通して行なうしかないが、近年の翻訳と対比する限り、彼が後に日本で伝統的になった地主夫妻への諷刺説をとっていたとは考えられない。いくつかの例をひいてみよう。

(二葉亭、以下二と略)「小露西亜の片田舎に、浮世を余所に身を埋もれて、地方の人に昔気質の地主様と呼ばれる人々の生涯ほど、質素で好ましいのも沢山はあるまい。」(Ⅲ・188)

(筑摩、以下筑と略)「わたしは、小ロシヤで普通昔かたぎ者と呼ばれている、片田舎の孤独な地主たちのつましやかな暮しが大好きだ。」(5)(傍点引用者、以下同じ)

この冒頭部はその後の訳調を端的に表わしている。近年の訳が比較的直訳調であるのに対し、二葉亭の訳は言葉をつくして懐しさを

強調している。同じ調子は以下の個所にも明らかであろう。

(一) 「むかし、其昔は、かうした非常の大事件も有ったのであるが、いつからとなく安らかな浮世離れのした生涯に入って、今は昏々と美しい夢の様な世を送って居る。」(190)

(筑) 「こうしたふるい昔の異常な事件も、いまはことごとく平穩な隠居生活に、うつらうつらとした、同時に一種調和にみちた夢見心地の生活に、とってかわられた。」(6)

(二) 「好い人達だ。客の為に生存して居るやうなものだ。」(188)

(筑) 「この氣のいい夫婦は客のために生きているといってもいいくらいで、」(12)

この調子は最愛の妻を失う老人の嘆きを描く場面に、殊の他顯著である。また、二葉亭は名前や代名詞を「お老爺さん」「お婆さん」とかえて、更に親しみを強めている。

(一) 「お老爺さんの口元は妙に歪んだが、それでも悲しいのを耐へて莞爾となり、」(204)

(筑) 「アファナーシイ・イワーノヴィチの口もとがどういうわけか病的にゆがんだ。彼はそれでも心内のかなししい氣持に打ち勝とうと思つて、にっこりして」(15)

(二) 「お老爺さんは面を揚げて、うつとりした目差で、其処らを見渡して、」(206)

(筑) 「すると彼はどんよりした目をあげて」(17)

(一) 「といひさして思掛けずハラ、と落涙し、」(209)

(筑) 「とまで言つたとたんに、その目から涙がほとぼしり出た。」(19)

二葉亭訳のお老爺さんは感性豊かにうつるが、一方のアファナーシイはでくの坊のように見える。次の個所も同じであろう。

(一) 「お老爺さんが、死んだお婆さんが呼んだのだと、一心に思詰めて、」(210)

(筑) 「老人はプリヘーリヤ・イワーノワナが自分を呼んでいるものとすつかり盲信してしまつた。」(20)

二葉亭の訳に接した読者が、ここに「地方貴族の惰性的生活の無意味さと低俗さ」を感じるとは考え難い。そして、実際に二葉亭が訳した意図もこれとは異なっていたであろう。このことは二葉亭にこの作品を注目させるきっかけとなつたと推測される作品を見ても確認できる。

一つは北岡氏が詳しく紹介しているストユーニンの「文学の理論的研究案内」(一八七五)である。北岡氏によれば、この本の「性格描写」の章にパーテュシコフ、ブーンキン、カラムジンらの作品と並んでゴゴリの『昔氣質の地主たち』がとり上げられ、その二人の主人公の性格描写を中心に「典型」の概念が説明されている。そこで、この二人によって他の人たちにも共通する特徴が表示されていると論じられ、文学の表現は一般的なものを個別的なものうちで展開することだという「小説総論」につながる考え方が明らかにされているが、特に二人の主人公への価値判断は示されていない。

(57)

ところが、同じく外語時代に二葉亭が接したと考えられるペリンスキイの論文「ロシアの中篇小説とゴーゴリ氏の中篇小説」(一八三五)には、主人公に対する価値判断を表わす表現が見出せる。『昔気質の地主たち』の解説によく引かれるこの論文は、ペリンスキイの評論活動の最初期のもので、ペリンスキイと言えば社会評論的批評の代表、ロシアリズム批評の元祖のように考えられがちであるが、この論文はドイツの美学思想に魅せられた若いペリンスキイのみずみずしい情感にみちている。

この論文の主旨は決して、作品の意図が「この動物的で、ゆがんだ、カリカチュアの生活のあらゆる俗悪さと醜悪さ」を諷刺することにあると説くものではない。その主旨は、俗悪さ醜悪さにもかかわらず、この魅惑はどこから来るのか、地主夫妻を「悪意なしに」笑い、彼らに同情するのは何故なのかを問い、二人を生き生きとさせている「人間的感情」を指摘するものである。つまり、ペリンスキイはこの作品を諷刺と見る見解にくみしてはいない。

このように、『むかしの人』を訳した二葉亭の立場は、訳の調子から見ても、この作品に興味を向けさせた評論から見ても、「ロシア社会を諷刺的にえぐり出した」作家としてゴーゴリを解する立場だとは考えられない。二葉亭のゴーゴリ観、そして彼のロシア文学観とは、単なる言葉の上での観念的解釈を越えて、もっと彼の内奥の文学的感性につながるものとして解されねばならない。そうして初めて、例えば、『茶筍髪』という腹案で戦争未亡人の社会問題を描こうとした二葉亭が、なぜそれを放棄して、『其面影』の中で自分の江戸音曲趣味まで担わせた小夜子を描いたか、理解できるのではなかるうか。『其面影』に対して評された「一種なつかしい、の

んびりとした所」(Ⅲ・406)という言葉は、そのまま『むかしの人』を訳した二葉亭に捧げられるに違いない。

そしてまた、最後の作となった『平凡』の出だしの調子、「私も老込んだ。(中略)老込んだ証拠には、近頃は少し暇だと直ぐ過去を憶出す。いや憶出しても一向憶出し榮のせぬ過去で、何一つ仕出来した事もない、どころぢゃない、皆碌でもない事ばかりだ。が、それでゐて、其失敗の過去が、私に取っては何処か床しい処がある、後悔慚愧腸を断つ想が有りながら、それでゐて何となく心を惹付けられる」(Ⅳ・101、傍点引用者)といった調子も、幾重に屈折しているとは言え、無為徒食の地主夫妻の生活に懐しき、床しきを見出そうとしたゴーゴリをふまえてはいまいか。『其面影』、『平凡』と続く晩年の二作と『むかしの人』の結びつきは存外深いように思える。

#### 四

現在最も信頼に足る二葉亭論の一つである中村光夫氏の「二葉亭四迷伝」には、「ロシア文学の彼にたいする感化は、彼に生きかたを教へたので、小説の手法をあたへたわけではないのです。」(64)というしばしば引用される言葉がある。この言葉は二葉亭とロシア文学の問題を考える時、必ず取組まなければならない言葉であろうが、ここでも最後にこれに触れておきたい。

中村氏は近代文学における二葉亭の意義を、ロシア文学から、小説とは単に「人の性質を写す」だけでなく、「一国の大勢」をも描くものだと学び、それを実践しようと試みたことに求めた。しかし、これまで見てきたように、二葉亭のロシア文学観には、彼が口

に出したものでだけでは測りきれぬものがあまりに多い。つまり、中村氏の言葉をもじって言うなら、ロシア文学の二葉亭に対する感化は、小説とはかくあるべしと教えたのであって、実際の創作上での指針を彼に与えたわけではなかった。彼の創作、翻訳活動は自らの観念的な文学観を裏切る方向に進んだが、それはおそらく江戸の音曲、戯作文学に愛着を感じた彼の内奥にいくらか由来するものである。ゴーゴリに即して言うならば、彼がゴーゴリに見出したものは、自らの懐古的な内面と響きあうものであり、それは彼の知るロシア文学のイメージとあまりに隔たっているが故に、敢えて口に出さなかつたものである。しかし、ゴーゴリと落語、戯作文学のつながりが公然と語られるようになった今日、むしろ二葉亭は先駆者として讃えられるべきではないか。日本におけるロシア文学受容の歴史は、二葉亭が言葉に出した部分だけを引きつぎ、彼がその文学的感性でとらえたものを切り捨てて行った道だと考える。

## 注

- (1) 金子幸彦「ロシア文学案内」、岩波文庫、昭和三十六年、木村彰一、北垣信行、池田健太郎「ロシアの文学」、明治書院、昭和四十一年、中村喜和、灰谷慶三、島田陽「ロシア文学案内」、朝日出版社、昭和五十二年、など参照。
- (2) 「日本近代文学大系4、二葉亭四迷集」、角川書店、昭和四十六年、補注(あひどき) 例頁参照。
- (3) 未完のもの、翻案を含めて九篇、但し後述の『虚無党形氣』を加えれば十篇。
- (4) 一期、明治十九年「或作の一断片」(後述)、二期、明治三十年「肖像画」、三期、明治三十九年「むかしの人」、明治四十年「狂人日記」。
- (5) 清水茂編「近代文学鑑賞講座I、二葉亭四迷」、角川書店、昭和四十二年。清水茂「二葉亭四迷の人と作品」、36頁。
- (6) 北岡誠司「小説総論」材源考——「二葉亭とベリンスキー——」、「国語と国文学」昭和四十年九月号、29頁参照。
- (7) 明治十九年四月七日の書簡(VII・15)、未刊刻資料(清水茂編前掲書、清水茂「凡人の生活」そのほか——若干の新資料および未刊刻資料について——、395頁)などごくわずかである。
- (8) 「作家苦心談」(明治三十年、V・102)、「予が半生の懺悔」(V・288)など。
- (9) 清水茂編前掲書、清水茂「二葉亭四迷の人と作品」、32頁参照。
- (10) 前掲書、清水茂「本文および作品鑑賞、肖像画」、23頁。
- (11) 山本正秀「言文一致体小説の創始者に就いて」、「国語と国文学」昭和八年九号、94頁参照。
- (12) ベリンスキイの「美術の本義」など文学理論の文語訳はここでは考慮の外におく。
- (13) 中村光夫「二葉亭四迷伝」、講談社、昭和四十一年、84—85頁。
- (14) 新谷敏三郎「二葉亭「あひどき」の問題」、「比較文学年誌」第四号、昭和四十二年、67頁。
- (15) 前掲論文、65—66頁。
- (16) 中村光夫前掲書、86頁。
- (17) 新谷敏三郎前掲論文、65頁。
- (18) 坪内逍遙「柿の蒂」から。引用は中村光夫前掲書、80頁より。
- (19) 同、85—86頁より。
- (20) 清水茂編前掲書、清水茂「本文および作品鑑賞、余が言文一致の由来」、80頁参照。
- (21) 冒頭の会話。フレスタコフの正体が露顯した後は夫婦の対話らしきものはない。
- (22) 清水茂前掲論文、80頁。

- (23) 前掲「日本近代文学大系」,「小説総論」注, 47頁参照。
- (24) 「ロシア・フォルマリズム論集」, 現代思潮社, 昭和四十六年, エイ・ンバウム「ゴゴリの『外套』はいかに作られているか」, 256頁。
- (25) 中村光夫前掲書, 117頁, 十川信介「『浮雲』の世界」, 「文学」昭和四十年二月号, 28頁など参照。
- (26) 畑有三「二葉亭四迷——『真理』探究と『浮雲』の制作」, 「国語と国文学」昭和四十一年二月号, 53頁参照。
- (27) 注(8)参照。
- (28) 「明治文学全集17 二葉亭四迷・巖崎の屋おむろ集」, 筑摩書房, 昭和四十六年, 関良一「『浮雲』の発想——二葉亭論への批判」, 400頁参照。
- (29) 引用は前掲論文より。
- (30) 前掲論文, 400頁。
- (31) 原文の *Бакенбарды* (頰ひげ) と *усы* (口ひげ) の区別を認識して「葉亭はひげを髭、髯、鬚と書き分けたのかも知れない」。См. Толстой, Н. В. Полное собрание сочинений в 14 томах, М., 1937-52, Том 3, стр. 12.
- (32) 引用は「ゴゴリ全集」第三巻, 河出書房新社, 昭和五十一年, 『ネフスキイ大通り』, 11頁より。
- (33) ゴゴリの『ネフスキイ大通り』でも換喩はひげからウエーヌト, 袖へと移る。前掲書, 12頁参照。
- (34) 『浮雲』と『其面影』の冒頭が似ていることはしばしば指摘されている。
- (35) 十川信介前掲論文, 25頁参照。
- (36) 同, 26頁参照。
- (37) 前掲「日本近代文学大系」, 補注(浮雲), 40頁参照。
- (38) 「くち葉集 ひとかごめ」(VI・36, 40)参照。また, 明治三十七、三十八年の手帳によれば, 『茶筌』の雪江も発狂することになってた(VI・397)。
- (39) 『肖像画』の発表は官報局退職より早い。
- (40) 「子が半生の懺悔」(V・271)参照。
- (41) 清水茂編前掲書, 清水茂「本文および作品鑑賞, 肖像画」, 218—223頁参照。
- (42) ここでは長篇と呼ばれるものだけを考え, 『はきちがへ』などの小品は考慮の外におく。
- (43) この二つの引用のルビは比較の都合上, 引用者が残した。
- (44) cf. Jonge, A. Gogol. In Fennell, J. (ed), *Nineteenth-Century Russian Literature*, Faber & Faber, 1973, p. 88
- (45) 「世界文学大系80『ゴゴリ』」, 筑摩書房, 昭和三十八年, 横田瑞穂「解説」, 307頁。
- (46) 前掲「ゴゴリ全集」第二巻, 解説(服部典三), 300頁参照。
- (47) Erlich のように諷刺でも牧歌でもない中間の立場をとる人もいて Fanger もうたに近くが, 諷刺とだけ考える人は少ない。cf. Erlich, V. Gogol, Yale UP, 1969, p. 58. Fanger, D. *The Creation of Nikolai Gogol*, Harvard UP, 1979, p. 96.
- (48) Číževskij, D. *History of Nineteenth-Century Russian Literature*, Vol. 1, *The Romantic Period*, Vanderbilt UP, 1974, p. 117.
- (49) Jonge, *op. cit.*, p. 90.
- (50) Driessen, F. Gogol as a Short-Story Writer, Mouton, 1965, p. 121.
- (51) cf. Karlinsky, S. *The Sexual Labyrinth of Nikolai Gogol*, Harvard UP, 1976, p. 62
- (52) なお, ニコエタでもキョロマンのような牧歌と考える学者もいる。См. Пинныс, B. *Toropb*, Brown UP (Repr.), 1924 (1963) стр. 84.
- (53) ここでは対比の便宜上, 筑摩「世界文学大系」から北垣信行訳『昔かたぎの地主夫妻』を選んだ。

- (54) 北岡氏によれば、当時外語の図書館にあって、授業の教材にも使われたと推測できる。清水茂編前掲書、北岡誠司「二葉亭とロシア文学」、299・303頁参照。
- (55) 同、294・297頁参照。
- (56) 同、297—298頁参照。
- (57) 北岡氏の訳に従えば、二人は「知的発達が低く、そのために迷信深い、おひとよしでおとなしく、互いに穏やかな思いやりをよせ合い、好きである。」(同、297頁)
- (58) 外語蔵書の「ムリンスキイ著作集」(一八七二—七六)第一巻のこの論文には「二葉亭自身のもと思われる書きこみがあった。北岡誠司『小説総論』材源考」、14頁参照。
- (59) Wallek はどうしてムリンスキイが「唯物論者」「リアリスト」と呼ばれるのかわからぬと語っている。cf. Wallek, R. A History of Modern Criticism 1750—1950, Vol. 3, The Age of Transition, Jonathan Cape, 1966, p. 245.
- (60) cf. Ibid., p. 224.
- (61) Великий, В. Собрание сочинений в 9 томах, М., 1976, Том 1, стр. 169.
- (62) Там же.
- (63) cf. Driessen, *op. cit.*, pp. 126—129.
- (64) 中村光夫前掲書、104頁。
- (65) 同、100頁参照。
- (66) 「ゴオリ原作 江川卓演訳、外套——落語訳のこころみ」、『樂』昭和五十六年、132頁参照。

附記 なお信州大学人文学部宮川康雄教授、教養部橋浦史一助教授に資料の便宜をはかっていただきました。記して謝意を表します。